

## はじめに

学習指導要領では、子どもが「他者と協同して課題を解決していくこと」や「自分の思いや考えを深める学習の充実」が重視されている。これからの社会を生きる子どもたちには、知識の習得にとどまらず、互いの考えを認め合いながら思考を深め、課題を主体的に解決していく力が求められている。

物語文を通して子どもたちが登場人物の思いや行動について自分なりに考え、それをなかまと伝え合うことは、言語力の育成に加え、他者理解や自己理解、さらには学び合う関係として子ども同士がつながっていく姿にもつながる。様々な見方に触れることは、自分の考えを見直したり新たな視点を得たりするきっかけとなり、学びをより豊かなものにしていく。

そこで本校では「伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子どもの育成 ～子どもの言葉を大切にしたい授業づくりを通して～」という主題のもと、子ども同士のつながりを大切にしながら読みを広げる授業を実践し、その過程でどのような学びの深まりが生まれるのかを明らかにしていく。

## 1 学校教育目標

確かな学力・豊かな心・健やかな体を育み、家庭・地域とともに歩む活気ある学校

## 2 研究主題及び研究領域

伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子どもの育成

～子どもの言葉を大切にしたい授業づくりを通して～ 研究領域:国語科の「読むこと」(文学的な文章)

## 3 研究主題・研究領域設定の理由

本校の子どもたちは、なかまとの対話の中で新たな問題に気づいたり、よりよい解決方法を見つけ出したりしていく力が弱いという現状がある。友だちの考えを傾聴することや、自分の考えを適切な言葉で表現すること、相手が理解するまで粘り強く説明することなどに課題が見られる。それは、これまでの学習や生活において、それらの経験が不足していることが要因の一つに挙げられると考えられる。

そこで、令和7年度から「伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子どもの育成」を研究主題として設定して研究を行っている。国語科は、言葉を通して考える力や伝える力を養う最たる教科であり、培った力は日常生活や他教科にも大きく影響する。その中でも「読むこと」で扱う文学的な文章は、子どもが問いを立てやすい側面があると考えられる。例えば「なぜこの登場人物はこんな行動をしたのだろうか」「どうしてこう言ったのだろうか」といった問いは、自分の価値観や体験から出発した問いであり、主体的な学びにつなげやすい。また、読み手によって解釈の幅があることから、多様な読みができ、他者と考えを伝え合うことを通じて理解を深めることができる。自分とは異なる考えに触れる機会も多く、異なるからこそ「伝えたい」「分かってほしい」という思いも生まれやすいと考える。

国語科は、どのようなことを学び、どのような力がついたのかということが実感しにくい教科であるともいえる。一方で、教師自身が学習指導要領の内容に沿った単元の目標を設定し、子どもたちにも単元目標を明確に示して授業を展開することで子どもたちがどの単元でどのような力を身に付けたかを実感することにつながり、新たな単元でも既習の内容を生かそうとする姿につながりやすい教科であると考えられる。そのためには、自分の変化に気づける振り返りの場をつくるなど、子どもたちが自分の成長を実感できるような工夫も必要である。

令和7年度には、子どもが子ども同士の言葉で多様な価値観に触れながら学びを深めていくための研究を1年間進めてきた。結果として、伝え合いたくなる課題設定、対話を生む土台作りについては成果が見られた。しかし、対話を深めるためのつなぎ方、伝えたいことを伝え合える学級づくりについて課題が残った。

そこで、今年度も研究主題、研究領域を継続し、特に「対話を深めるために子どもの言葉をどうつなぐか」ということを重点的に研究を深めたいと考える。

## 4 研究主題について

伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子どもの育成

～子どもの言葉を大切にしたい授業づくりを通して～

### (1) 「伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子ども」とは

研究主題の「伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子ども」とは、「互いの意見や考えを共有することで、自分の考えだけでは到達できなかった視点や価値観に出会い、思考を深め発展させていくこと」と定義する。そのためには、自分の言葉で考えを述べられたり、なかまの発言に反応し、興味を持って聞けたりするような子どもたちの状態が前提となる。授業の振り返りでは、「最初はAだと思っていたが、なかまの考えを聞いて、確かにBの考え方もあるな。」「みんなで考えたら、自分だけでは気づけなかったことが分かった。」といったような姿をめざす。教師は「考えの違い」に特に注目しながら、どの子の考えも取り上げながら、対話が広がるように手立てを講じる。

### (2) 「子どもの言葉を大切にしたい授業づくり」とは

「教師が正解に誘導するのではなく、子どもの発言、つぶやきや疑問を起点にした授業」と定義する。そのためには、授業の中に子どもが自分の言葉で語れるような場面が必要である。さらに子どもが安心して話せる状態が必要となる。教師は考える時間を保障し、時には沈黙を受け入れることが大切である。また、子どもと子どもが自分の力で考え、深め合えるように、場や流れを整えるファシリテーターの役割が求められる。子どもが考え続けられるように出場を見極め、問い返したりゆさぶったりしていく。物語文は読み手によって受け取り方が異なる。だからこそ、子ども自身が「自分はこう感じた」と思える読みを見つけていくことに価値があると考えられる。教師は子どもの実態をもとに、どのように読み深めるかをイメージしておくことが必要であるが、方向を押し付けるのではなく、子どもが自分たちの読みを伝え合い、考えて深め合えるよう授業を進める。

## 研究構想図

